

## 編集後記

レフェリーや編集委員の御協力で1号2号と何とか発行できたと思った矢先、突然転動することになり、3号は石川幹事にすべてを託して引越してしまいました。責任を果せなくて申し訳ありませんが、石川幹事をはじめ皆様がよりよい方向に持って行って下さると思うので、今後の発展を期待致しております。

皆様からいろいろ御意見や御批判を戴きましたが、一部を取り入れ、後日独断的に編集した傾向がありました。しかしすべての御意見を取り入れたならば雑誌は発行できなかったかもしれません。Editor の意見が強く出てこそ特色のある雑誌になるのではないかと思います。軌道に乗った今ならば修正も可能かと思いますが、質の向上につながるものだけが許されると考えます。編集委員会の意向に同調して御投稿下さった会員諸氏にあらためて御礼申し上げます。

(斎藤泰一 51.11.4.倉敷にて)

3号誌をやっとお手元にお届けできました。本誌の生みの親、育ての親と、私などは思っておりました斎藤幹事(編集委員長)が、急にご転動になられるという事で、そのおはちが回ってきてしまいました。委員長に、編集任務の全てをお任せしっぱなしであったことを悔いています。でも幸いに、委員長がすっかりとレールを敷いておいて下された上に、有能な高江洲、藤村、上野、関山各編集委員がおられることで、新しく名和委員も加わって下されたので、本会の機関誌に相応しいものを刊行してゆきたいものです。

この3号誌には、総説1編、原著、臨床各2編のご投稿をいただきましたし、前から計画されておりましたトピックスもはじめて掲載できました。各著者の方々に感謝をいたします。また、本号までが第1巻ですので巻末には総索引(総目次)と著者名索引をつけました。合本のときにご利用下さい。できるだけ、本会の

行事予定を会員の方々に知っていただき、大いにこれらの事業にご参加下さるように、巻頭にはカラー頁を加えました。早速、予定表にメモして下さい。

本誌には、機関誌として会員皆様のご意見を多数盛っていきたいと思いますからどしどしその声を委員会までお寄せ下されることをお願いします。

(石川 富士郎 51.10.30.)

各大学や学部発行の「紀要」は多いがほとんどのものは読まれることも少ないのが実情です。われわれもこの種のものを作る以上は学位論文の収録雑誌にはしたくないものです。難しい原著論文はもちろん結構ですが、オリジナルな内容のものをだれにも解かるようにうんとやさしく書いたものを載せるのもよいことと思っています。

(藤村 節夫)

本学会誌も1巻3号を結ぶところまでできた。創刊号編集の折、斎藤委員長を中心として予測したことは、学会誌の特色を出して年間何号まで刊行できるかというのであった。とくに、斎藤委員長が提唱された投稿手引きの内容については、学会誌の特色が発揮できるように努力がなされた。情報過多の現代において、本学会誌にユニークな情報源が期待されるのは当然である。そのために本誌に対する批判も多々あることであろう。しかし、本誌はまだまだ育ていく過程にあることも忘れてはならない。

日頃、研究室で見過されていく現象の中にきわめて重要な課題がひそんでいることがしばしばある。時代の流行的課題に目をうばわれがちな昨今ですが、独創性に富んだ課題は意外と身の状況から生れることが多い。ふるって御投稿ください。(高江洲 義矩)